

徳照代日記

七

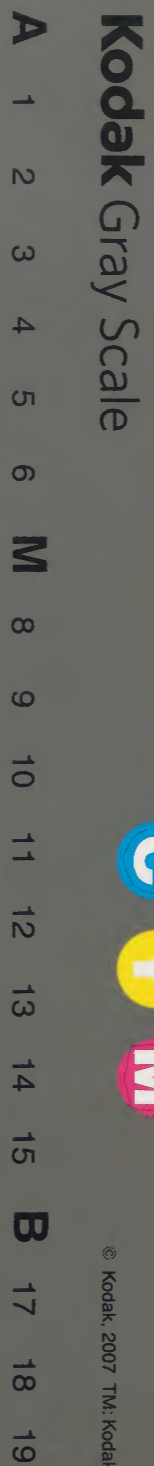
蚤御家

庫	文	閣	内
四	三		和
九	三		
函	一		
二	一		
一	冊		
架			



内閣文庫	
番 號	和 33120
冊 數	11 (7)
函 號	149 111

第二



© Kodak, 2007 TM: Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

武德照代日記

山本政貞撰

慶長十九甲寅年

十一月

六日

發之永原至川玉乃今朝傾

神君入中井大和言止之ケル

計聖護院門之與意且園城寺



僧侶秀頼ハ密旨ヲ蒙ルルニ
君ヲ呪詛シ奉ルニ由三井寺
資本覺坊是ヲ訴フト云ハレ則
板倉勝重可糺断由命アリ
攝州神崎ニ於テ池田忠継水
練ヲ以テ瀬踏ヲ廿七今黎明
傳ヲ川端ニ繰詰身ツカテ駿
馬ヲ河水ニ打入先登シケル

其從軍備前勢ハ言ニ及ハス
忠継力合傳タリニ傳中庭瀬
ノ戸川肥後守達安猿掛ノ花
房志摩守正成高松ノ花房助
兵衛職之カ子五郎左衛門職
則等忽チ川ニ乗入テ七千餘
ノ惣軍一騎モ流レズ押渡ル
ヲ以テ川向ニ扣ヘシ大坂方

ノ番兵周章ノ逃走ル処ヲ追
誥テ首級ヲ多ク撃得夕リ然
ノ忠継等北中ノ島小和田ニ
陣ニ野里ヲ歴テ南中ノ島ニ
赴カント欲ス爰ニ於テ武藏
守利隆ヲ始森美作守有馬玄
蕃頭神崎川ノ上ノ瀬ヲ押渡
リ悉ク進云既ニ忠継制令ヲ

背キ一隊先登スル赴キ早速
神君ノ隊長ニ告ニ上聞ヲ歴
ル其弱年ニハ似合夕此働ヲ
由却テ如御感不斜ト云々
是日松平下總守力美濃
組平野ヲ癸ニ尚ニ進ム五人
平野ノ警固ヲ松平安房守信
吉ニ傳命セラル信吉當時相

守泉州岸和田ヲ北條出羽
守氏重ニ渡シ平野ニ赴ク此
所ハ大坂ヨリ行程僅二里ト
云ニ木津川ノ船留ヲ溝口伊
豆守宣政命セラルルニ
或曰加藤左馬介ハ江府ニ
殘サレ其子式部少輔明成豫
州ヨリ渡海シ神崎ノ川上ニ

扣ヘ其臣加賀山小左衛門永
ヲ以テ乍候夕方ニムル処ニ
歸リ来リ早ク川ヲ越テ屯セ
ラルヘシト云フ加藤家ノ功
臣川村權七郎但次郎兵衛一
成昔ハス此寒天ニ夜陰ニ及
テ川ヲ越ハ士卒凍ヘ敵寄来
ル時手足屈下リ一戦ニ利ヲ

失フヘシ川ノ此方ニテ夜ヲ
明シ明早且ニ涉ル可ナリ
ト称ス群士皆是ニ同ヌ加賀
山カ曰臣軍理未熟ト云ヘ氏
今宵川ヲ越シ可然歟其故ハ
此川ノ上下ニ渡シト臨メル
味方ノ内最早涉サントスル
用意アリ譬躑躅セシトスル

備アリ共一陣涉サハ續テ涉
ルヘシ諸軍皆渡シテ天明
朝軍アウニ時當手討一戦モ
遂サレ時ハ第一武名ノ瑕瑾
遁ルヘカラス第二ニハ兩
御所ノ御疑ヲ蒙リ国家危ヲ
カウニ天下ヲ味方ニ持スナ
レハ戦世ノ土地ヲ争フ端軍

トハ大ニ異ナリ強テ勝敗ニ
モ拘ハルヘカラス後度ノ夏
ヲモ慮ルヘカラス唯人ニ先
ニシテ戦フヲ以テ專要トセ
ラレヘキカト云ヘリ河村大
ニ甘心ス佃ハ暫ク思惟ニ足
下壯歳ト云ヘ氏唯今ノ諫
理ニ當ル予力及ハサレ所也

ト其夜忽チ川ヲ涉シ北中ノ
島ニ屯ス世挙テ河村佃力忠
ヲ專トシ己ヲ建サレテ感
ス抑當時天下悉ク神君ニ
怖伏シ大畧大坂へ出陳スト
云ヘ氏諸侯ノ内秀吉ノ登庸
ヲ以テ興起スレ族多ケレハ
神君ノ御疑ナクハ非ス爰

ヲ以テ強クニ開ノ勝敗ヲ論
也ス魁出先登ノ丹心ヲ顯ス
ヲ以テ功ノ第一トスヘシ大
坂堅城ニメ大軍タル氏何ソ
海内ノ猛勢ニ比スヘケシヤ
一敗一勝ヲ謀ル小戦ヲ格ト
スヘカラス加賀山カ武略拔
群トイフ人シ

七日保和州平群郡竜田ヨ
州国府越ヨ近日大坂ニ御動
座ヲ立テ住吉ヲ御本陣トセ
テ此ヘキ昔令沐下シ玉ヲ
台徳公江州永原ニ御滞座後
軍至ルヲ待セ玉ヲ蜂須賀阿
波守至鎮江府ヨ直ニ京着
之ヲ拜謁スル所其速ニ参陣

スル莫ヲ感之臣又將敗者輸
其淺野但馬守長晟分国紀陽
ヲ祭之大坂ニ向ヲ処和州吉
野紀州北山筋一揆蜂起近淺
野右近力紀州新宮ノ城ヲ伺
ヲ右近モ長晟ニ随テ唯波ニ
赴テ故其留守戸田六左衛門
兼々新宮ノ城下野中ノ質子

ヲ城ニ納メ堅ク守テセ凶徒
ノ虚ヲ量リ地下兵ニ二千余
人新宮川ヲ涉リ一揆ヲ擊破
ル殘黨這々芳野郡ニ逃走ル
又紀州有田白高ノ二郡凶徒
ニ與ニ覺ヒ起ル長晟途中ヨ
リ二千余ヲ遣ニ征伐ニ熊澤
兵庫賊將ヲ討捕狩野主膳ハ

唯一人敵將湊惣左工門力許
へ往渠ト奮知工へ往トヲ談
話之虚ヲ伺テ湊ヲ斬ケレハ
相従フ二百余人徒忽亡ヲ長
晟此凶徒ヲ討シムルニ日數
ヲ費シ今日漸ク往吉ノ古妻
ノ郷ニ着陣シ藤堂ト均シク
整然堂内ノ陣ヲ設ク依之孫

大坂城中ヨリ出テ擊退ヲ得
スト云々
八日池田武藏守利隆一
万余兵長柄川ニ至テ嚮ニ弟
左工門督忠継ニ神崎川ノ先
登ヲ奪ハレ無念骨髓ニ徹シ
此川ヲ涉リ南中ノ島ニ至シ
トス城ヨリ織田有樂大野治

房渡辺内藏介後藤又兵衛
七組ノ士凡相加ハリ一万余
兵天満ニ陳之ケルカ折節南
中ノ島ヲ巡視シ池田家ノ旗
旗ヲ見テ川端ニ備ヲ立ル兼
テ神君ヨリ城和泉昌茂ニ
命アリケルハ倚前播磨ノ勢
神崎川ヲ渡スニ傷ヒテ猥ニ

利隆長柄川ヲ涉ントスルニ
汝川ノ淺深ト其所ノ地理ヲ
量リ卒尔ヲ制スヘキトナリ
依之今既ニ敵川向ニアルヲ
見テ利隆急ニ川ヲ越ントス
ル処和泉沮ニケルハ川深ク
峻地ニメ敵ハ主戦味方ハ客
戦夕リ輕忽ニ川ヲ越スニテ

敵ノ動靜ヲ伺ヒ船ニテ涉ス
ヘシト云フ利隆力曰敵ヲ見
テ進マサルハ勇ナキニ似夕
リ既ニ川越ノ具ヲ修スル上
ハ忽チ川ヲ越テ勝リナクシ
ハ敵中ニ死セシ縦令利隆一
隊皆没スル凡吾軍ノ敗ニハ
及フヘカラス利隆力命ヲ爰

ニ全クシ城攻ル凡味方ノ勝
ヘキニ非ス早ク川ヲ涉リ必
死ノ一戦ヲ決スヘキ昔再三
強テ請フ和泉力曰予ハ大
御取ノ監使吾詞ハ御説ト
均シカラスヤ和泉力詞ヲ用
セサル則ハ叛逆ノ徒ニ准ス
ヘシト大音揚テ頻リニ罵シ

ハ利隆牙ヲカミテ止マリ今
安倍四郎五郎モ爰ニ来リ和
泉ヲ諭シ今ルハ敵味方對揚
ハ人数夕リト云ハ氏敵ハ鳥
合ノ徒然モ引心付テ實地ノ
戰ヲ好ムハ力ヲス河ヲ涉リ
撃ハ忽敗亡スヘシト云今レ
氏此和泉力父ハ城意庵ト号

之謙信或ハ信玄ニ仕ハ各称
愛ハ勇士ニシ此和泉モ織部
介ト称之勝頼ノ時英武ノ聞
ハアリシカ小迫合ノ格ヲ守
リ後ハ勝ヲ專ルニ敵ハ奥深
ク取テ安倍力詞ヲ忘セヌ
同日ノ晚池田左衛門督忠
繼並戸川花房ホ不備中勢長

柄川以下瀨八水深キ工
船筏ヲ組テ渡ルニ不レ処
ニ今宵敵南中ノ島ヲ棄テ天
満ニ引入爰ヲ持固ク或ハ敵
ニ非テ自燒ノ敵ヲ引込地ヲ棄テ大
ハ十ニ月梅ノ夕世英大沙岡
九日池田左邊以督忠継
北中ノ島ヨリ南中ノ島迄移

石川主殿頭及山陰道豊後
ノ国士長良川吹田川ヲ越テ
北中ノ島ニ至リ池田武藏守
氏爰ニ赴キ中ノ渡リニ船橋
ヲ直ニ天満ニ押渡ラシメ
一ノ城和泉又是ヲ抑メ留ム
抑利隆忠継同胞ニ非ズ利隆
中川瀨兵清秀力外孫ニシ

其繼母

神君

常利隆ヲ憎

以リ殊ニ其領内播磨八攝州

十隣スルヲ以テ内林秀頼入

利隆其志ヲ通スル故ニ神崎

川長良川ヲ越ル身ヲ猶豫シ

敵南中ノ島ヲ退少後又中ノ

渡河ヲ歴テ天満ノ地ニ押入

テ踞蹞ス此皆巷説喧々然ナ

危殆ヲ懐クト云

城和泉昌茂此誤

以テ遂ニ放逐セテ

十日台徳公永原ヲ發輿

セテ尾州遠州ノ兩參議大

津追分迄迎ヘ去リ當所ヨリ

醍醐山科迄文武迎會ニ良賤

來賀ス未ク尅伏見ノ城ニ着

御供奉ノ諸軍勢ハ伏見ノ近

郷ニ充滿ス本多正信坂東ノ
度政ヲ沙汰シ御跡ヨリ發シ
今晚名護屋ニ着ク會ニ
宇都宮家説ニ台命ニ依
テ治部左衛門宗房是日洛陽
ニテ大坂敵徒追討ノ夕ノ艾
蓬射法ヲ執行ス二十一日
武士一割ノ台徳公ニ條ノ城

平渡御今造ノ神君大坂御動
座ナキヲ謝シ本多上
野介安藤成瀬板倉ホニ軍制
ヲ諭サレ大坂御出陣ノ期日
ヲ沙汰セテ未ニ尅伏見ノ
還御大坂ニ於テ某屋今井宗
薫莫茶道ニ熟スホテ以示其
朋友織田有樂力愁訴頻ニテ

遂ニ宗薰並嫡子宗吞縹綬ヲ
遁シ上京セシメ宗薰ニ條ニ
登營ス神君渠ヲ召テ犒
玉ヲ且成瀬隼人正ヲ大坂表
ニ遣ハシ池田忠继戸川安達
花房正成カ一族長良川ヲ越
テ南中ノ島ヲ取敷雜卒ヲ討
取首級ヲ獻スルヲ褒セテ

上忠继カ兄利隆ヲ始西海ノ
諸軍是ニ後レテ未夕神崎近
辺ニ支工ル所以ヲ伺ハシメ
玉ヲ當月朔日以来今日迄三
ヶ度尾州名古屋ノ城ニ兼
蓄ヘ置ル白銀三千貫目ニ條
ニ來着ス西海ノ諸軍
會津ノ蒲生忠郷ノ元老岡

半兵衛重政數回忠卿母儀
命ヲ背ク由ヲ訴ハシ此母
堂ハ是神君ノ姫君タルニ
重政力祿ヲ放ツヘキ旨御
設ノ赴今日老臣奉書ヲ投ス
尾陽參議中將義直卿伏見
ヲ發シ紹喜郡木津迄出張セ
ラレ

大坂城中ニ於テ新座ノ部
將長曾我部森真田後藤仙石
明石等ニ神君天王寺ニ御着
陣スルハ忽逆寄メ一挙ニ勝
敗ヲ決セシトス大野治長並
七組ノ隊長頭ヲ振テ曰今度
ハ天下ノ猛勢ヲ引受今日ノ
軍ヲルニ熱メ合戦メ初ニ利

シ失ハハ々畢竟ノ勝利得カ
カルヘキ也堅城ニ多勢楯篋
敵ヲ欺キ火銃ヲ以テ日々
士卒ヲ討亡サハ果シ先考秀
吉恩顧ノ諸侯裏切メ勝リ
掌ノ内ニ得ツヘシ危キ軍ヲ
成ヘカラスト云ヘリ新座ノ
客將等絶ヲ起メ曰戦坐不意

ニ發シ敵ノ惰氣ヲ撃テ以テ
大勝ヲ得ルヲ和漢其例多シ
海内ノ猛勢ヲ引受空ニク篋
城セシメテハ自カテ敗亡ヲ取
仁均シカレヘシト諫公上
遂ニ許容セズ不道也
十二日天台真言ノ僧侶
在洛セルカ中ニ秀テ夕元

召集メウレ傳長老ヲ以テ高
野ノ僧侶ニ清淨行者不入涅
槃破戒比丘不墜地獄ト云フ
田覚經ノ文ヲ題トシ論義
御聽聞ノ所佐竹義宣參着ス
ル由近且言上ス神君論議
ノ間ニ是ヲ披露スル所及ハ
ニヤト怒ラセ玉ヒ論議終リ

僧徒ニ對シ大坂軍事アリテ
衆向ス幾程ナク飯京ニ又論
議ヲ聞ヘシト上意アリテ
後佐竹義宣拜謁セシムル處
ニ御容負御言語殆ト平日ノ
如ク聊モ軍旅ヲ以テ御心ヲ
勞セラレハ体ニ非ス此昔今
思月リ三音夕日ヲ過テ大坂美

風聞之奮臣客將也神君ノ英
雄ニノ無刃ノ大度夕ニ下ラ
感賞也弥秀頼ノ利運有入力
ヲ廿力ト憂苦ス
是日薄暮ニ南光坊天海
並金地院傳長老出仕ニ明十
三日辛酉南行ニ凶日夕ニ音
言上ニケレハ大坂へ明旨ヲ

御首途ヲ延滞セラレ此由ヲ
休見入毛告ガセ玉フ

十三日大坂ヨリ監軍横
田甚右清門山城宮内少輔飯
参之先鋒ノ諸將城外四五里
ニ屯シテ遠夕圍ム由ヲ演説
ス神君ノ曰諸將ホ大樹
ヨリ下知ナキ以前ニ軍スハ

力ヲ廿儿旨制令不八
出廿儿
十四日
之法制ヲ施
一拜謁
十五日
條ノ城御進
或曰佐
木六角大膳義高

于時大膳亮三歲御首途御祝
酒ノ御酌ヲ役不是曩祖盛
網力鑲倉右大将家ノ時出
陳ノ酌ヲ勤之先聚ヲ逐
卜云六部義高輔義禎二男兵
二條ノ城門下丹波口ノ警言
衛ノ管谷左清門佐範貞十

秋春架ノ...

神君未ノ尅山城國級喜郡
木津寺谷着御ノ処奴隷ノ
中自怪心者アリ傳馬ヲ
出又時改メ捕入推問ヲ遂
テシテ力奈何ナリ且力
此ノ深ク密セテ木津ハ
地ノ利宜ニ力ヲ又其御
漬ヲ献知ル後扈從ノ士十

五騎ニテ忽ク和州南都ハ
渡御アリテ中坊左近時祐
力宅ヲ以テ御陳館トナシ
其法ヲ麾下ノ族曾テ是ヲ知
テ程過テ木津庄官力宅狹
西キ工ハ南都ニ御座ヲ迂カ
ル由披露ス各駭キ駿馬ニ
菜ヲ揚ル御旗長柄トナシ

一夜陰ニ奈良ニ赴ク尚ニ木
津ヲ御陳取ト知セニ為ニ馱
馬雜卒ハ皆貽ニ置ル
同日御出馬アリテ河州
見城ヲ御出馬アリテ河州
交野郡牧方ニ著御兼ニ同兩
築阿味經營スル茶亭ヲ以テ
御本陳トセテ弓銃出卒ヲ

態ト後陳ニ置玉ヲ松平周防
守因部内膳正山陰道ノ兵ヲ
引卒シテ攝州ノ地ニ入吹田
川ヲ涉リ西成郡北中ノ島ニ
至リリ粵ニ山口修理亮重政
ハ大久保忠隣力連座ニテ改
易セテ武州生越ノ龍穩寺
ニ蟄居セシ力土井利勝力許

へ書ヲ呈之偽リテ大坂へ籠
城之間隙ヲ伺ヒ秀頼ヲ刺殺
之君恩ヲ報スヘキ為ニ妻子
ヲ江府ニ殘之置質トシテ箱
根迄赴ク所ニ関所ニテ抑
留メラルル哀レ恩許ヲ得テ素
忠ヲ果サシムルヲ庶幾ヌル旨
ヲ載ル利勝則之高聞平及カ

此是ヲ制止スル旨利勝
本多正信ニ命セラルレ則チ
返翰ヲ投ス
十六日雨降シテ神君
御朝餉中坊左近是ヲ献ス御
膳於此間觀世左近太夫合
属ノ散樂延命喜四郎縁頼ニ
伺公ニ謡曲ス巳ノ刺御出馬

河内行程四里ヲ歴テ法隆寺
ノ内阿弥陀院ニ著御臺台往
公ハ牧方ヨリ河州河内郡平
岡ノ神官力宅ニテ御勤座牧
方ヲハ美濃ノ國士大島治右
濤門光成同茂多衛光政同久
左濤門義俊是ヲ相守心願台
往公永井信濃守直政ハ使節

ノ母神君ノ法隆寺ノ御陳
ハ遣之去リテ
水軍向井將監大坂轉法院
ニ着岸ス初將監ハ台命ヲ蒙
リ相州三崎ニ其父忠安ヲ留
メ彼湊ヨリ纜ヲ解ク處ニ其
日暴風起リテ且霰ヲ飛ス船
進退往リヲ得スハ忠勝ト共

正帆ヲ發スル其餘ノ水軍皆
三崎ニ飯リ快晴ヲ待テ船ヲ
出スヘシト議ス將監是ヲ肯
ハス然共尚風止サリテ
船手ノ族皆三崎ニ泊ル將監
力棄船一艘從者力棄船一艘
艦ヲ操テ進ニ行夜ニハ風尚
強ニ舟人皆疲労ス將監氣ヲ

勵シ力ヲ副テ三日ヲ歷テ勢
州龜山ニ至ル從船ハ風ニ放
タレ其往処ヲ知ス將監力從
士水主皆氣勞シ力尽夕リ爰
ニ於テ医療ヲ加ヘテ後龜山
ヲ發船ス其餘ノ水軍連日風
波穩カナラズ依之今日ニ至
ル迄未夕大坂へ着津セスト

ト云々
十七日 神君法隆寺ヲ祭
之玉ノ諸軍是ヨリ鎧ヲ着ス
龜ヶ瀬越順路夕リト云ハ氏
軍旅ニ赴ク者駄馬匹夫共ニ
此道ヲ往ヘカヲサレ昔
上宮太子遺誠アリテ今以テ
石碑存ス依之関越ヲ歴テ

住吉ニ著御アリ 高虎
住吉ノ北ナル陳所ヨリ天王
寺ニ移リ其舊營ヲ八尾陽義
直卿陣取トセラル岡山下茶
磨山ノ間葭谷口ニ遠江頼宣
卿屯セラル然レ高虎住吉ノ
御本陣ニ來リ見ルニ麾下ノ
士皆武田家ノ樂ノ堂ヲ用ユ

神君加賀利常ヲ召テ高虎上
共ニ大坂ノ攻口地形ノ損益
地圖ヲ以テ是ヲ論ニ利常ニ
是ヲ教ヘ玉ヘリ。台從公王
河州河内郡平岡ヨリ攝州伊
北郡平野へ御着陣諸道具奉
行小野次郎右滂門忠昭ハ劍
術ノ暇者法州ヲ經歷ニ武略

ノ名士故樂ノ堂ヲ用ヒサレ
ハ不淨ナルヲアウシト先日
本多佐渡守ヲ諫メケレハ正
信是ヲ許容シ幕下ノ士悉ク
樂ノ堂ヲ用フト云々。志州
志州ノ九鬼長門守守隆尾
州師ノ崎ノ千賀與八郎信親
且小濱民部光隆木ノ水軍今

日着津之向井ト共ニ轉法院
口ニ船ヲ進ム此外南海中國
諸侯ノ水軍野田福島ニ續ク
新家居村ヲ乗取ント欲シテ
大坂ノ番船ト火炮ヲ發シ挑
ニ戰フ然レ氏新家居ハ芦原
入江ニシテ船ヲ寄カタク敵
又陸地ニモ兵ヲ賦メ火炮ヲ

放ツ故即功ヲ遂カタシ
大野道大侍四五人輕卒ニ
三十人ヲ忍船ニ乗セ芦島新
家居辺ノ寄手ノ水軍ノ体ヲ
伺ハシメル所ニ二三日ヲ歷
テ夜中イタ夕睡眠シケルヲ
西國方ノ番船ヨリ是ヲ知テ
密力ニ忍ヒ寄鎧綱ヲ断テ川

下ノ味方類船ノ間ハ引入麩
奥州ノ伊達上杉羽州ノ佐
竹既ニ伏見ニ至リケレバ後
軍ノ上ルヲ待歎未夕大坂ニ
来ラヌ
南部家説ニ信濃守利直畿
内ノ地ニテ神君ノ大坂

由ニ赴カセ玉フ時ニ到着ニ
路旁ニ躰踞ニ諏訪部惣右
衛門定吉披蓑ニ拜謁ヲ遂
ニ此既ニ軍伍相定ニ故後軍
ニ可扣御旨ヲ蒙ルニ
十六日一兩大臣攝州東成
郡茶磨山ニ上御攻口ヲ遙

二 監臨之玉ヲ後堂高虎炮卒
ヲ山下ニ傳フ頃年大須賀家
ヲ立退之横須賀衆ノ棟梁久
世三四郎坂部三十郎廣勝召
二 應之参向之此所ニテ拜謂
ス則チ再上御家人ニ列ニ畢
又然シテ大阪ノ城郭縱令惣
曲輪ヲ破ル上モ無類ノ名城

ナレハ抜下ヲ得カ夕ニ向城
ヲ取ニ築キ神君ハ畿内
ノ地ニ放鷹之玉ニ 徳公
ハ一旦伏見迄軍ヲ返サレ来
春六至リ再上御動座アラニ
ヤト晉議セラレケルカ今既
三井伊若輩越前家ハ猛勢天
王寺表敵城ノ黒門ニ迫リ其

餘モ惣郭ヲ去テ數丁ニ過ス
惣攻テリテ外郭ヲ破リ玉フ
ヘキニ決シテ天満川仙波筋ヲ
川水ヲ乾カシテ步渡リニセシ
為ニ淀川ノ流ヲ新庄村ヨリ
鳥飼ノ辺ニ掘通シ新庄村ノ
端ニテ北中ノ島ノ間ニ北川
口ヲ堰苗淀川ノ流ヲ北ニ落

シテ天満川今橋筋ノ川水乾
カハ土俵芦芽ヲ投入步渡リ
又惣郭ヲ可攻取テ攝河兩
國ヨリ土俵數二十万余芦芽
ノ類悉ク運送スヘキ旨ヲ觸
促シ玉フ

仙臺政宗カ使者山岡志广
重永伺公ニテ四五日中ニ政

宗着陣スヘキユヘ屯ノ地ヲ
窺フ処木津今宮ノ間夕ルヘ
キ旨御説ヲ蒙ムル豊島主
膳信訪加ニ爪甚十郎直澄日
下部五郎八重好山上弥四郎
田上右京秀行村瀬権右清門
假ニ御使番ニ列ス未夕五文
字ノ捺物ハ免許ナシ申ノ刺

兩公茶磨山ヨリ還御
川口寺島ノ南ノ崎ニ向ヒ
三軒尾ノ端穢多カ城ハ小妻
郷ニ陣スル蜂須賀阿波守カ
船大将ノ森甚五兵衛ハ川ヨ
リ進ニ稲田修理宗祐中村右
近ハ陸地ヨリ向ヒ彼城ノ損
益ヲ見届ケシハ阿波守住吉

二往テ本多正純ニ倚テ是ヲ
攻拔ニト請フ仰ニ曰彼城
ハ馬喰カ淵阿波座土佐座ト
モニ四砦相並フ由然シ氏壘
壁踈畧ニメ吾兵ヲ損サスヘ
カラサルニ於テハ淺野池田
ニ謀シ合セ是ヲ屠ルヘシト
云々蜂須賀則彼兩家ニ此ヲ

ヲ告ケレハ各間謀ヲシテ敵
砦ヲ伺ハシム淺野カ使節ハ
此砦偏小ニメ大兵ヲ費スヘ
カラス蜂須賀一軍ニテ攻ル
ニ足リト云ケレハ淺野ヨリ
兵ヲ發セス蜂須賀今朝水軍
森甚五兵清父子ヲ以テ以石
丹後全延カ二十艘ノ番船ヲ

忽千追拂芦島ノ敵ヲモ撃破
ル陸ヨリハ稲田中村樋口内
藏介森カ水軍ト共ニ穢多カ
崎々砦ヲ陥シ殘黨ヲ仙波ニ
追入神君則横田甚右清門
真田隠岐安峯治右衛門本多
峯四郎正盛ヲ以テ蜂須賀カ
功ヲ感セテ先手樋口並ニ

山田織部カ下知ノ宜キ次第
水軍森甚五兵清父子カ功ヲ
聞届ケ兵ヲ引退クヘキ旨ヲ
述ト云ヘトモ阿波守昔ハス
ノ中村右近ヲ以テ穢多カ城
ヲ守テシム
前ニ記ス如キニ穢多カ城ノ
穢多カ崎ハ二ヶ取ナリ穢

多力崎ノ砦ハ渡辺ト云フ
地ニノ野田福島ニ續ク故
彼兩所ト後日一同ニ没落
幕下ノ水軍新家居村ノ敵
ト再ヒ合戦ニ利ヲ得テ野田
福島新家居三ヶ所ノ間ニ屯
之此夜雞鳴ノ比九鬼長門守

力從軍裸ニ成テ脇差ヲ口ニ
クハハ川ヲ游キ大野修理亮
力兼テ大安宅丸及ヒ大船數
十艘繫キ誘兵ヲ置ケル所ニ
至リ大安宅丸ニ乗移シ向
井小濱千賀劣ヲト洞壁附
タル軍艦ヲ進メテ狭間ヨリ
火炮ヲ連發シ敵船ニ近寄其

取楫ヲ目懸テ逆艦ヲ以テ押
回シ洞壁武者走ノ戸ヲ倣ニ
押開キ鉤ヲ以テ敵艦ニ打掛
犇ニト棄移リ周章スル敵軍
ヲ斬伏ケレハ殘黨皆水中ニ
入テ逃ル者多シ向井忠勝唯
一人敵ノ番船ニ棄移ル取九
鬼力從士吾船ニ建置之船飾

ノ旗ヲ彼番船ニ投入九鬼長
門守一番棄ト称ス向井大ニ
怒テ一番棄ハ忠勝ナリ誰カ
論スヘキト云フ処ニ九鬼力
士微笑シテ貴客ハ坂東ノ船
軍ノ法ヲ知スヤ敵艦ヲ棄取
時勝関ヲ揚ル下長門守力從
士ノニ也殊ニ九鬼家ノ旗敵

船ニ建ル所貴客一人来リ一
番乗ト称セラル其理ナ
シ九鬼勢多ク乗移ル故敵兵
逃走ル弊ヘニ乗テ唯一人船
ニ乗移リ一番乗ト称セラル
ト謂ルナシ云々向井怒テ刀
ヲ抜ク于時小濱午賀来リ長
門守カ從兵乗移ルト云々共

守隆躬ツカラ至ラサル上ハ
此船ヲ向井ニ渡スヘシト云
フ長門守爰ニ至テ此詞ヲ聞
船軍ノトハ各ノ指揮ニ任ス
ヘシ殊ニ此等ノ功ヲ争ハシ
ヤト忽チ船ヲ授ク
是日味方ノ兵泉州堺ノ
津ニ入テ乱妨ノ聞ヘアル故

西尾豊後守光教

以テ警衛

ト書也

ト書也

ト書也

ト書也

ト書也

ト書也

